

高校入試における PISA 型学力分析について

——「読解力(読解リテラシー)」と国語入試問題——

● 島田研児 [Benesse 教育研究開発センター研究員]

第3 回目となる PISA 調査が、2006 年に実施された。
今回は「科学的リテラシー」が重点的に調査され、結果・分析は2007年の報告を待つことになる。

これまで2000年、2003年と3年おきに実施されてきたが、

2003年においては「読解力」の分野で日本が14位になり、「読解力の低下」が叫ばれるようになった。

文部科学省から「読解力向上プログラム」が発表され、

国がPISA型読解力の育成に注力しつつある今、同じ義務教育終了段階で行われる

全国の高校入試では「PISA型学力」がどのように測られているのか、「読解力」を中心に分析を試みた。

PISA をめぐる動向

2000年にPISA(OECD生徒の学習到達度調査)の最初の調査が行われ、32カ国約26万5000人の15歳児が参加した。日本も全国の高校1年生約5300人(133校)が調査に参加し、「読解力(読解リテラシー)」を中心分野として、数学的リテラシー、科学的リテラシーを合わせた3分野を調査した。続いて、03年に2度目の調査(41カ国・地域約27万6000人の参加。日本からは4700人。数学的リテラシーを中心分野として、読解力、科学的リテラシー、問題解決能力の4分野について調査)が行われた。その結果は図表1の通りである。

日本は「読解力(読解リテラシー)」において、過去2回の実施の結果、共に2位グループであり、特に順位だけを見ると03年度は00年度に比べて6位下がった。そのため、国内ではPISAショックが起これ、「読解力」の育成が叫ばれるようになった。文部科学省は05年12月に「読解力向上プログラム」を発表し、以下のような目標と戦略を示した。

「読解力向上プログラム」

各学校で求められる改善の具体的な方向～3つの重点目標～

各学校においては、教科国語を中心としつつ、各教科、総合的な学習の時間等を通じて、次のような方向(3つの重点目標)で、改善の取組を行う必要がある。

目標1 テキストを理解・評価しながら読む力を高める取組の充実

目標2 テキストに基づいて自分の考えを書く力を高める取組の

充実

図表 [1] 2000年度と2003年度のPISAの日本の順位

	2000年度	2003年度
参加状況と中心分野	32カ国約26万5000人 中心分野:読解力	41カ国・地域約27万6000人 中心分野:数学的リテラシー
読解力(読解リテラシー)	8位(2位グループ)	14位(2位グループ)
数学的リテラシー	1位(1位グループ)	6位(1位グループ)
科学的リテラシー	2位(1位グループ)	1位(1位グループ)*
問題解決能力	——	4位(1位グループ)

*1位グループである4カ国中、日本とフィランドは同得点で1位となっている
『生きるための知識と技能』『生きるための知識と技能②』(国立教育政策研究所編/ぎょうせい)より

目標3 様々な文章や資料を読む機会や、自分の意見を述べたり書いたりする機会の充実

文部科学省や教育委員会の取組

～5つの重点戦略～

文部科学省では、教育委員会と連携しつつ、上記**目標1～3**で示した各学校におけるPISA型「読解力」の向上に関する具体的な改善の取組を支援するため、次のような施策等(5つの重点戦略)に積極的に取り組むこととする。

戦略1 学習指導要領の見直し

戦略2 授業の改善・教員研修の充実

戦略3 学力調査の活用・改善等

戦略4 読書活動の支援充実

戦略5 読解力向上委員会(仮称)

[出典:『読解力向上に関する指導資料』文部科学省(東洋館出版社)]

これら3つの重点目標と、5つの重点戦略の内容で、特に注目すべき点を整理して以下にまとめた。

1. PISA型「読解力」として強化すべき点は「解釈」「熟考・評価」「自由記述」「さまざまな文章や資料の読解」

重点目標で挙げている3点はPISA調査の結果、日本の生徒が苦手とされる分野・慣れていない分野に対応したものである。

2. PISA型「読解力」育成のために学習指導要領が見直される（PISA型「読解力」の内容が指導要領に反映される）可能性がある

3. PISA型「読解力」を問う問題が、高校・大学の入学者選抜試験で測られるようになる可能性がある

重点戦略3においては、「現在、地方で独自に実施している学力調査や高校・大学の入学者選抜試験の学力検査問題についても、知識や技能だけではなく、それらの活用度も重視する方向で改善が図られるよう、各種会議等を通じて、PISA型『読解力』の定義や特徴、公開問題等について積極的に周知する」とある。

このような状況の下、現状の指導・評価では「PISA型学力」、特に「読解力」がどの程度養われ測定されているのかという疑問が起こる。日本の子どもが特に苦手とする「熟考・評価」「さ

図表 [2] 読解力 5つのプロセス分析基準

	プロセス	分析基準	設問例
①	情報の取り出し	「情報の取り出しはテキストそれ自体および含まれている明白な情報に基づく」。そのため、空欄補充（テキスト内の語句を用いたものも含む）問題は、③「解釈の展開」に含むものとする。また「字義的・同義語的に合致するものを探す」ため、解答として一文（それ以上）を抜き出させるものについては、①「情報の取り出し」の範疇とする。	語句抜き出し・部分抜き出し問題・非連続テキストの単純なデータ読み取りなど
②	幅広い一般的な理解の形成	「幅広い一般的な理解を形成するために、テキストを全体としてみるか、あるいは幅広い視野から考察」する。部分的な内容ではなく全体に関わる問題。	タイトル問題・主旨／テーマ説明問題・要約問題・展開把握問題・段落並べ替え／挿入問題など
③	解釈の展開	与えられたテキストの部分的な「論理的理解」を求めている。テキストの情報の構成を加工しなければならない。情報を比較・対照し、推論し、証拠を明確にし、一覧表にする（まとめる）ことが含まれる。つまりテキストの複数の箇所について情報を整理し、部分に関しての理解を深めることが求められる。	傍線部の内容説明問題・傍線部の理由説明問題など
④	テキストの内容の熟考・評価	「読み手に、テキストの情報と他の情報源からの知識とを結びつけることを求める。テキストにある主張を、世界についての彼ら自身の知識と対比させながら評価しなければならない」。つまり外部の知識を用いて、テキストの情報を評価したり、自分の意見を述べたり、正当化したりする。与えられた条件で作文したり、自分の立場を選択して、理由を明確にして主張したりすることなどが当てはまる。外部の知識とは「生徒自身の知識」「提示されたその他のテキスト」「質問で明示的に提示されたアイディア」など。	課題作文・条件作文・計画立案問題など
⑤	テキストの形式の熟考・評価	「筆者が何らかの特性を描写したり、読み手を説得したりするのにどの程度成功しているかを評価する」ための「実質的な知識だけではなく、言葉のニュアンスを見分ける能力」を試す。ある目的のためにある特定のテキストがどれだけ役立つかを判断する問題、ある一定の目標を達成する上で著者があるテキスト上の特徴をどのように用いているかを評価するような問題。つまりテキストの内容の評価ではなく、テキストタイプに対する考察（質・効果・位置付けなど）や、表現技法・文体などテキスト上の特徴を評価する問題。	表現効果問題・テキストの質／適切さを評価する問題など
その他	PISA読解力定義から外れる問題	PISA「読解力（Reading Literacy）」の規定の中に「社会で役割を果たすのに必要最低レベルの技能という意味で用いられることの多い『識字（literacy）』ではなく、むしろ将来それぞれのコミュニティに積極的に参加することを期待されている生徒たちの手段あるいは道具として捉えているのである」とあること、またPISAが国際調査であることから、日本の言語に依りすぎている知識中心の問題については基本的に除外することとする。	漢字・語句・文法・敬語・韻文ルール・辞書の使い方などの知識問題／放送問題／古典問題

『PISA 2003年調査 評価の枠組み』（国立教育政策研究所監訳／ぎょうせい）を参考に作成

図表 [3] 高校入試問題・国語に見るPISA型の問題集計

全体集計	2006年度	2005年度
全小問数	1400	1375
読解プロセス ①情報の取り出し	144	131
読解プロセス ②幅広い一般的な理解の形成	101	112
読解プロセス ③解釈の展開	347	332
読解プロセス ④テキストの内容の熟考・評価	51	49
読解プロセス ⑤テキストの形式の熟考・評価	20	11
	※20大問・18県	※11大問・11県
読解プロセス ⑥その他・該当しない	737	740
テキストの形式 (1) 連続型テキスト	1196	1179
テキストの形式 (2) 非連続型テキスト	8	8
	※ 8大問	※ 8大問
テキストの形式 (3)	2	0
連続型テキスト+非連続型テキスト	※ 1大問	
テキストの形式 (4) なし	194	188
知識問題	497	498
放送問題	24	19
	※ 7大問	※ 6大問
古典問題	216	223

さまざまな文章や資料の読解」などの問題が、現状の高校入試では出題されていないのか、また出題されているとすればどの程度の頻度・レベルなのかという観点から、05年度、06年度の全都道府県の高校入試をもとに出題内容の分析を行うことにした。

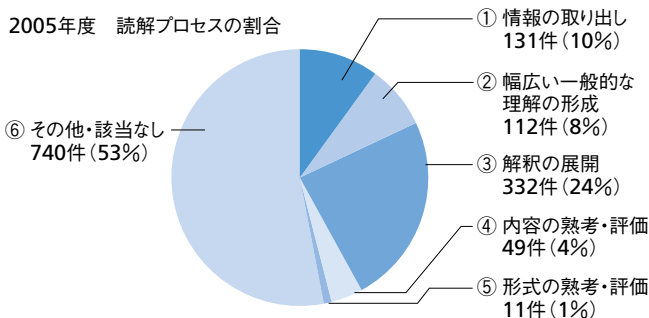
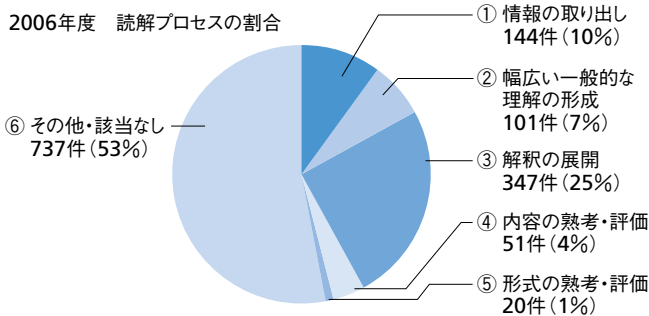
分析概要

今回は、国語・英語・社会で「読解力」、数学で「数学的リテラシー」、理科で「科学的リテラシー」の内容がどの程度出題され、また、どのような形で出題されているかを中心に分析を進めた。ここでは「読解力」の出題状況を「国語」で分析検討した結果を掲載する。

分析の対象：47都道府県公立高校一般入試・国語科より、05年度および06年度のすべての問題を対象とした。

分析方法：国語入試問題の各小問について、PISA型読解力に対応しているかどうかという観点で分析を行った (P.49、図表2)。その際に注目したポイントとしては、(1) 図表2の読解のプロセス①～⑤のどれに当てはまるか、(2) テキストの種類 (連続・非連続・複合) は何か、の2点がある。注意しなければならないのは、従来からの国語入試問題においても上記 (1) の読解のプロセスに該当する問題は当然出題されており、このプロセスのいずれかにその問題が当てはまるからといって、PISA型読解力を

「読解プロセス」別出題割合



問う問題が多く出題されている (もしくは増えた) とはいえない点だ。今回の分析では、その中でも今までの国語入試ではあまり問われなかった、「読解力向上プログラム」で育成の中心とされている「熟考・評価 (プロセスの④と⑤)」及び「非連続型テキスト」を重点的に検証した。また、知識問題 (漢字や語句・文法、国語の知識など)・放送問題・古典問題については読解力のプロセスに対応させることが困難なため、分析では扱わなかった (集計は行いが対象外とした)。

分析基準：

1.読解プロセスについて

高校入試の各小問が、PISAで規定されている5つの読解プロセスのどの力を問っているか図表2のような分析基準をたて、それにもとづいて集計を行った。

2.テキストの種類について

- (1) 連続型テキスト
- (2) 非連続型テキスト
- (3) 連続型テキスト+非連続型テキスト
- (4) なし の4タイプに分類。

※非連続型テキストは設問指示や簡単な説明が文章中に含まれているものも含む。

※ (4) は漢字や語句の小問集合問題や、放送問題などが当てはまる (古典問題は連続型テキストで処理)。

※評論文などの後に、設問で流れを図示したものは非連続テキストに含めないこととする。

分析結果

集計数値について

今回の分析のポイントである「熟考・評価」と「非連続型テキスト」を中心にみると、「熟考・評価」問題は、05年度、06年度共に全小問の5%（「内容の熟考・評価」4%＋「形式の熟考・評価」1%）程度、「非連続型テキスト」を扱った問題は、全都道府県で8～9大問程度と、わずかな出題となった（図表3）。高校入試の要件を考慮すると、中学校での履修内容の定着度の測定が中心になるということもあり、また説明責任の観点からオープンエンドな解答が可能な設問形式の出題は難しいということもあるだろう。逆に、そのような制限の中で上記のような割合で出題がなされているともいえるのである。

熟考・評価について

1. 「熟考・評価」型問題については、「形式の熟考・評価」の出題数（出題県）がやや増加

11県・11問から18県・20問へと増えた。多くは表現の効果・特徴を問う問題が中心で今や頻出の感があるが、05年度に見られず06年度に出題された設問としては、本文中における「具体例」の役割をたずねる問い（岐阜県大問2問4）や、インタビュー形式の素材文の中のある「発言の役割」を問うもの（静岡県大問3問3）など、ある部分が本文全体の中で「どのような役割を果たすか」という問題が見られた。

2. 「内容の熟考・評価」の出題数については、ほとんど変化はなかった

3. 「内容の熟考・評価」について、多くは課題・条件作文に該当するが、中にはかなり工夫が見られる出題もある。その例を見てみよう

図表4の(1)は、与えられた「絵」を構図が伝わるように（見ていない人に）説明する問題（情報の取り出しプロセスの要素が強いが、ポイントを判断し自分でまとめる観点から熟考・評価として集計）。「地元のラジオ局からの依頼で、中学校生活についてのラジオ番組を作ること」になり、「インタビュー形式による放送原稿の一部」が素材として与えられている。その放送原稿の中で、「校章」のデザインに触れ、デザインのもととなった葛飾北斎の「富嶽三十六景」の「神奈川沖浪裏」を「ラジオ

図表 [4] 問題事例

(1) [静岡県 大問三・問五]

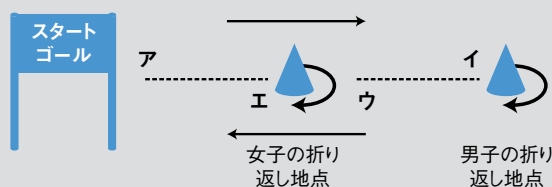
問五 傍線部5は、下の様な絵である。ラジオを聞いている人たちに絵の構図が伝わるように、富士山と波の、位置と大きさを説明する文を書き加えたい。本文中の【 】に、富士山と波の、位置と大きさを説明する文を補いなさい。なお、「その絵は、」に続けて、一文で書くこと。

(2) [山梨県 大問五・問七]

問七 「何のために、どんな労働をするか」ということにかかわって、AやBの文章を読む前と読んだ後の、あなたの考えについて書きなさい。二百四十字以内で～（以下省略）

(3) [富山県 大問三・問2]

2 傍線部②「いつか筒見とすれ違う」とありますが、筒見とすれ違ったとき僕はどこにいたと考えられますか、次のような図で表したコースのア～エの地点から一つ選び、記号で答えなさい。（矢印は走る方向を示す。）



をお聞きの皆さん」に説明するくだりがある。そこで、受験者（生徒）は与えられた北斎の「絵」を見て「富士山と波の、位置と大きさを説明する文」を解答しなければならないといった問題である。

PISAの「非連続型テキスト」の「テキストの種類」には純粋な「絵」は含まれていないようだが、文章ではない素材の説明をさせる点で共通性があり、読解リテラシーを問う問題であると思われる。

図表4の(2)は、同一テーマの複数連続テキストを読み、自分の考えの変化について書く作文問題。「労働に対する考え方」について書かれた2つの素材文を読んで、「労働」についての自分の考えの変化を書かせる問題。単独のテキストを読んで、そのテキストの内容をふまえ自分の意見を書かせる作文問題は多く出題されているが、複数のテキストを与えている出題は少ないと思われる。大学入試の小論文などでは見かけられるが、各テキストの内容の違いを明確にしたり、比較したりすることが必要となり、より難度が高くなる。PISAの読解プロセスの「内容の熟考・評価」にあてはまる問題であり、受験者（生徒）にテーマについてより

深い理解を求める出題だと言える。

図表4 (P.51) の(3)は、本文から読み取ることが出来る情報を図で考える問題。今回の分析のポイントである「熟考・評価」プロセスではなく、「情報の取り出し」問題であると思われるが、PISAの公開問題例(「アマンダと公爵夫人」問4/図表5)と大変よく似た問いである。

マラソン大会の場面を描いた小説で、「僕」が「筒見」とすれ違った地点を文章の中から読み取り、それを与えられた図の中のどの地点か答える問題。PISA公開問題にある、劇の脚本の中のあるシーンで複数の登場人物が舞台上のどの位置にいるかを示させる問題とよく似ているといえる。

非連続型テキストについて

4. 「非連続型テキスト」の出題数はほとんど変化なし(複合問題含む)

- 06年度：非連続型テキストを使った大問8問
複合(連続+非連続)の大問1問
- 05年度：非連続型テキストを使った大問8問
複合(連続+非連続)の大問0問

5. 06年度では「連続型+非連続型」の出題や複数の非連続型テキストによる出題が見られた

まとめ

このように見ていくと、決して多くはないが、現状の入試問題にも「熟考・評価」「非連続型テキスト」の観点でPISAの読解力を試す問題が、出題されているといえる。ただ、これらの問題はPISAで定義されている能力を試すために用意されたということではなく、「より深い理解」を確認するために、あるテキストの内容を異なったテキストタイプで検証させたり、複数のテキストの内容をまとめさせたりしているのではないだろうか(図表6)。

現状の入試問題においても、上記のような形で「読解のプロセス」と「テキストのタイプ」の観点から考えれば、十分PISA型の出題は可能であるといえるが、「テキストが用いられる用途」という観点からいえば、入試においてテキストの状況設定は固定的であり、「職業的」「公的」といった用途の素材文を採用するこ

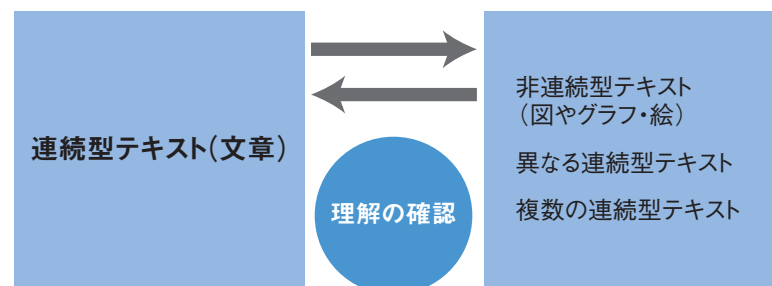
図表 [5] 2000年度PISA公開問題より

アマンダと公爵夫人に関する問4
舞台上に俳優を配置するのは、演出家です。演出家は図の中で、アマンダを文字A、公爵夫人を文字Dと表しています。

以下の舞台図にAおよびDを記入して、王子が到着したときアマンダと公爵夫人がそれぞれどこに立っているのか、およその位置を示してください。

『生きるための知識と技能』(国立教育政策研究所編/ぎょうせい)より

図表 [6] 連続型テキストと非連続型テキストの関係



とはあまり考えられない。例えば「非連続型テキスト」の中には、時刻表や価格リストなどの「情報シート」や、チケットや請求書などが含まれる「バウチャー」など、入試では扱うことが難しいであろうテキストの種類がある。これは今回の分析ではむしろ英語の出題で多く見られた。英語の場合は履修して期間が浅いこともあり、高校入試段階の英語力を試す際に、さまざまなテキストから情報を読み取ることが有効であるためであろう。国語においてはPISAの調査対象技能が「将来の社会生活において重要であると考えられる技能」である以上、進学のための要件との間にギャップや違いがあるのは当然のことだ。今後も、入試における出題はあくまで「履修内容の確認」と「合否決定」の要件を満たすことを中心とするが、その延長上でより深い「理解の確認」を行うための方法として、「熟考・評価」問題や「非連続型テキスト」問題の出題が検討されていくのではないだろうか。